PHILOLOGIA 42 (2011) 181-186

William Urry によるマーロウ伝 *Christopher Marlowe and Canterbury*. London: faber and faber Ltd, 1988. xl + 141 pages.を読む

Book Review: William Urry, *Christopher Marlowe and Canterbury*. London: faber and faber Ltd, 1988. xl + 141 pages.

坂 本 つ や 子

（Tsuyako Sakamoto）

William Urry（1913-1981）のマーロウ伝 *Christopher Marlowe and Canterbury* は、著者の死後、夫人の協力を得て、ケント大学に所属する Andrew Butcher が草稿を編集し、1988 年に出版した研究書である。近著でないものの書評をするのは多少気が引けるが、2002 年出版の Constance Brown Kuriyama によるマーロウ伝 *Christopher Marlowe: A Renaissance Life.* Ithaca and London: Cornell University Press, 2002. なども ユーリーの業績あっての研究であることを考えれば、ここで紹介する意味はあると思う。

ブッチャーの序文に従って簡潔にその生涯を追ってみる。ユーリーは 1913 年にカンタベリーに生まれる。同市のケント・カレッジを卒業したのち、ロンドン大学のバークベック・カレッジで BA の学位を得る。第 2 次世界大戦に従軍したのち、1946 年にカンタベリーに戻り、カンタベリー大聖堂付属古文書館に勤務する。1951 年にはあわせて同市の文書館員にも任命される。彼は勤務の傍ら手元に無尽蔵にある資料をもとに、市の歴史について調査研究を行なった。彼は市の通史を執筆する計画をもっていたが、その中には当然、著名な二人の人物、ヘンリー 2 世時代にカンタベリー大司教をつとめた Thomas Becket（c.1118-1170）およびカンタベリー出身の劇作家で詩人、Christopher

Marlowe(1564-1593)についての研究も含まれていた。

ユーリーは 1967 年に上梓した *Canterbury under the Angevin Kings*（2 vols.）等の業績によって、Society of Antiquaries および The Royal Historical Society のフェローに選ばれる。1968 年にはオックスフォード大学 All Souls College のビジティング・フェローとなる。1969 年には同大学において中世西欧古文書学(Medieval Western Palaeography）の準教授となり、St Edmond Hall 学寮のフェローに選ばれる。引退後は故郷カンタベリーに帰り、病を押して研究を続ける。1981 年に病死した時には、カンタベリー市通史の一部をなすはずであった、マーロウ研究の大量の草稿が残されていた。

ブッチャーはユーリーの研究の意義について、テクスチュアル・クリティシズムが主流の現代では、歴史主義的な方法や作家個人に関する資料をもとに作品を論じることはあまり評価されないが、芸術家と、その人を生み出した文化とのつながりを考えることは必須であると指摘している。またユーリーの研究の成果を総括して、同時代の他の劇作家と比べると不明な点の多かったマーロウの生涯について、かなりのことが解明できた点、また複雑で矛盾に満ちたマーロウの性格を明らかにすることができた点を評価している。

本論は５章に分かれている。またほぼ同程度のページ数を割いて Appendix I~VIII がある。アペンディクスにはマーロウの生涯にかかわる様々な記録や公文書が収録されている。本論およびアペンディクスの内容について幾つか紹介する。第１章「由緒ある都市（‘*An old city*’）」において、著者は当時のカンタベリーには、芝居の上演について古くからの慣行があったことを指摘している。遅くとも 13 世紀頃からは、大聖堂と聖アウグスティヌス修道院(St Augustine’s Abbey)の修道僧たちが、祭礼の時には役者や芸人を招いたことがわかっている。市当局は宗教劇を上演するための資金を提供したし、西側市壁の外にある聖ダンスタン教会(St Dunstan’s Church)は、聖書のエピソードを扱うサイクル劇を所有していた。マーロウの少年時代には、ほとんど毎年のように旅芝居の一座が訪れ、ギルドホールや大きな旅館で芝居の上演があったことが記録されている。

由緒ある宗教都市は政治的ページェントにも事欠かなかった。最大のものは 1573 年 9 月 3 日のエリザベス女王来駕である。9 月 7 日（水曜日）、女王はカンタベリー大主教 Matthew Parker (在位 1559-1575)の公邸で誕生日を祝った。

第 2 章「家族、親族、隣人たち（*Family, kin and neighbours*)」には、クリストファーの父、John Marlowe が、すでに一人前の靴職人であったにもかかわらず、市内の親方のもとに短期間徒弟奉公することで、いわば面倒を避けて「裏口」からカンタベリー市の自由市民（フリーマン）になった（1564 年 4 月）経緯が詳しく書かれている。またマーロウ一家の家族構成、ジョンの徒弟たち、マーロウ夫妻の実家や親族たちについて、クリストファー以外の子供たちの成人後の人生について、綿密な調査結果が示されている。そのほかマーロウ一家と交流があったと思われる人々の氏名や、彼らが市のどのあたりに居住していたかについても、可能な限り調査がなされている。なお Appendix VI にはマーロウの両親の遺言書、Appendix VII にはジョン・マーロウの財産目録（インベントリー）（これは家具、調度品、細々した日用品等も含むものである）、Appendix VIII には公文書その他に残っているジョンの署名が収録されている。

第 3 章「キングズ・スクールからケンブリッジへ （*From King's School to Cambridge*)」および Appendix I には、カンタベリー出身者でマーロウと同時期（1578 年のミケルマス*から 1579 年のミケルマスまで（*聖ミカエル祭、9 月 29 日、なお大学の学期はミケルマス・タームから始まる））に、キングズ・スクールに在籍していた学生たちについて、彼らの家族関係や縁戚関係、ケンブリッジに進学した場合はその学寮名、生涯に就いた職業や役職などが詳しく説明されている。ユーリーはキングズ・スクール（1541 年ヘンリー8 世創建）について、この学校は文字通りカンタベリー大聖堂の影に建てられていて、学生は年間 80 回程度あった大聖堂の礼拝式に参加する義務があっただろうと推測している。

ユーリーはマーロウがキングズ・スクールに在学していた時代の校長（ヘッドマスター）であり、彼を指導したと考えられるオックスフォード出身の MA、John Gresshop

についても研究している。Appendix II には Gresshop が死去した際に作成された詳細な財産目録（遺産分配のためのもの）が収録されている。目録には普段彼が使っていた日用品や衣類が詳細に書き込まれている。それらは現代人の目から見れば非常に倹しいものであるが、その中で注目すべきは彼の蔵書である。Kuriyama も言及しているが、Gresshop は歴代の校長と比べ、格段に学識のある人物であったと考えられる。彼の蔵書—学生向きの書物については、教え子は直接手に取ることが許されていたと考えられる—は、住まいの各所にある書棚に分散されていたが、合計すると 350 冊を超えており、これは当時としては大学学寮教員の個人蔵書と比べても桁違いに多かった。

カンタベリーでは、大主教であったマシュー・パーカーとコーパス・クリスティ学寮のフェローたちの設けた奨学金（1548 年には 6 名分、その後ノリッジ・スカラシップが加わり、1569 年にはキングズ・スクールの学生のためにカンタベリー・スカラシップが設けられた）によって、あまり裕福でない家の子弟がケンブリッジ大学のコーパス・クリスティ学寮（当時はベネット学寮）に行く道が開かれていた。マーロウの時代には大主教の息子であるジョン・パーカーが候補者を指名している。

ケンブリッジ時代について、ユーリーは当時の大学都市の規模や構成員、授業の内容、マーロウの個人教師（Mr. Kett）、カンタベリー出身の友人 John Benchkin—マーロウ一家は彼の義母 Katherine が遺言書を作成し直した時に、証人として署名している—を含む学友たちとの関係、彼が大学都市を不在にした時期とその理由等、詳細に検証している。Appendix III にはキャサリンの遺言書が収録されている。

第 4 章 「ロンドンおよびその他の土地において（*London and beyond*）」では、ユーリーは、ケンブリッジを去ったマーロウがロンドンに生活の基盤を置いていた時期について考察している。ユーリーは当時英国の担保都市(cautionary town)であったフラッシング（オランダの都市ヴリシンゲンの英語名）での貨幣贋造事件の経緯などについても詳しく述べているが、込み入った話なので省略して、カンタベリーと関係のあるところだけ紹介すること

にする。1589 年 9 月、マーロウはロンドンにおいて友人とともに刃傷沙汰に巻き込まれ、相手方が死亡する事件を起こしている。1592 年 5 月、彼は些細なトラブルを起こして再び逮捕されている。この時はすぐ釈放されるが、ミケルマスのあとでフィンズベリー（ロンドン北部）の法廷に出頭する義務を科されることになる。しかし彼は 9 月 15 日（金曜日）にカンタベリーにおいて仕立屋で聖歌隊員でもあった William Corkine を杖と短剣で攻撃した廉で逮捕され、出頭できなかった。この件は審理が進むうちに双方冷静になったらしく、結局、訴訟取り下げになったが、市の Town Sergeant であった James Nower の訴訟記録簿(plea book)に記録が残っている(Appendix IV）。ユーリーはこの記録簿について、本件と関係はないが、非常に印象的なエピソードを報告している。Nower は記録簿が一杯になったので、9 月 28 日から新しい記録簿を使いはじめている。これには前年の訴訟に関する記録も書き加えられた。マーロウがこの事件を最後に永遠にカンタベリーから去った後の 10 月 12 日付で請願された複数の訴訟を記録したページの終わり近く、1592 年夏の最後のバラの蕾が偶然閉じ込められていたのが近年発見された。ユーリーはこの遅咲きのバラ（ラストローズ）について、1993 年のバラが咲き始める頃には、マーロウはケント州の反対側の端で死んでいたのだと書いている。

第 5 章 「『ケント州に伝えてくれ、州随一の男をなくしてしまったといってな』（*'Tell Kent from me she hath lost her best man'*, *Henry VI*, Part 2, Act 24, Scene10)」では、ユーリーは 1593 年 5 月 30 日（水曜日）のマーロウの死について、マーロウが殺害された時、その場に居合わせた人たちと、彼らの背景について言及している。Eleanor Bull について、ユーリーは彼女の夫である Richard Bull はおそらく法律家であったこと、彼女自身の実家である Whitney 家は、ハートフォード州において少なくとも 13 世紀から続く名門であったことを指摘している。エリザベス女王の女官 Blanche Parry は遺言書を残すが、草稿は William Cecil が書き、その中で彼はブランチのことを 「親族（カズン）」と呼んでいる。この遺言書にある遺産受取人のリストには、ホイットニー家も含まれていた。ミセス・ブルが居酒屋、あるいは売春宿の女将であるというかつての

定説は、現在ではまったくの見当違いであることがわかってきた。しかし彼女がセシルの縁者である可能性が高まったことは、マーロウの死が当局によって仕組まれたものであるという、根強く残っている説を後押しする結果となった。

ユーリーはマーロウを殺害した Frizer の行為は正当防衛であるとしながらも、マーロウと同行した 3 人―Ingram Frizer、Nicholas Skeres、Robert Poley―が、法律の知識を悪用し、グルになって素人から金を巻き上げていた可能性を指摘し、マーロウは避けた方がよい人々と交際していたのだと考えている。また 6 月 1 日になって開かれた陪審について、陪審員の年齢、職業等を調査したうえで、彼らはすべて堅実な中産階級の人々であり、事件について誤った評決をする可能性は薄いだろうと論じている。

マーロウは宮廷の中心にいた人々の縁者の家で、諜報組織と関わりがある 3 人と一緒にいるところを殺害された。しかしユーリーはマーロウ殺害計画があったと考える必要はないと結論する。彼によればマーロウは自らの激しい性格のせいで殺されたのであり、彼を詩人にした同じ力が、人間としての彼を破壊したのである。

ユーリーはほぼ一生をかけてカンタベリーの古文書を読み続けてきた。彼の研究は惜しくもその死によって中断されている。しかしながら *Christopher Marlowe and Canterbury* において、ユーリーはカンタベリー人マーロウと彼を取り巻く人々について、また宗教都市としてのカンタベリーのシステムについて、古文書の示す範囲から逸脱することなく、誠実に正確に肉付けを行い、実体のある姿にして再現して見せた。彼の研究は地味である、しかしその成果に浴することで、マーロウ作品と、そのバックボーンとなっている、古い歴史を持つ都市において育まれてきた文化との関係を、解明することができると思う。